特集　グローバル化とアジア社会の変容――東南アジア地域研究の視点から

パプアニューギニア：空間の仕切り直しとローカリティの揺らぎ
――辺境の「旅」とフィールドワーカーの位置性をめぐって――

Papua New Guinea : The Re-articulation of Space and Shifting Locality :
Questioning "Travel" and the Fieldworker's Positionality on the Frontier

熊谷圭知*

KUMAGAI Keichi

キーワード：パプアニューギニア，空間（の仕切り直し），ローカリティ，ネイティヴ，旅，フィールドワーク，想像の地理

KEY WORDS : Papua New Guinea, (Re-articulation of) Space, Locality, natives, Travel, Fieldwork, Imagined Geography

Papua New Guinea (PNG) is situated at the periphery of the periphery in the world system. The land and the people of PNG have been subjugated and represented by the West. The image of PNG, however, is different from other Pacific island : an "untamed" male image in the former contrary to an innocent female one in the latter.

How have the local people become the "natives" in PNG ? Three different stories are represented by the author.

The Mianmin people, active hunters and aggressive warriors, moved frequently in and out of their territory and attacked their neighbours. After contact with the colonial government, they were prohibited from fighting and shifting territory, which spoiled their cultural dynamism. The people's enthusiasm in building airstrips reflects their eagerness for "travel" outside which might give them greater opportunity.

The people in the Black Water river basin have been encountered wiht the global powers : first, the colonial government in 1930, then Japanese soldiers foraging for foodstuff at the end of WWII, and presently the foreign tourists seeking out "unexplored" frontiers. The local people are expected to play as the "natives" and are gazed at by travelers while having little chance of travel on their own.

The Simbu migrants reside in an unplanned settlement in Port Moresby. While Port Moresby's urban space has been drastically developed and "beautified" by the government, the settlement has been totally excluded. The settlers, regarded as the people "wrong" migrants to town, are to be repatriated to their original place. They are still represented as the "natives" by the postcolonial regime in PNG.

I, as a fieldworker, am traveling and representing the realities (what I believe) of shifting localities in PNG. I/We, situated "in-between" space, should intermediate the divided worlds to re-articulate space for negotiation and re-imagination.

＊お茶の水女子大学助教授 Associate Professor, Ochanomizu University

はじめに――辺境からの視点

パプアニューギニアは，世界システムの「周辺」の「周辺」にある。私は，そのパプアニューギニアの中でも辺境にある村や，都市の周縁に位置する，農村からの移住者の掘立小屋集落を自らのフィールドにしてきた。

シンガポールやジャカルタといった大都市が，いわばグローバリゼーションの具現化される空間であるとすれば，それとはおよそ位相を異にするパプアニューギニアの辺境から，空間の「仕切り直し」とローカリティの変容について，いったい何が見えてくるのか。それが本稿に与えられた課題である。私自身の問題意識は，グローバリゼーション研究が不可避にもってしまう西欧中心主義的な傾向に対し，ローカルなリアリティを批判的に対置することで，両者の間に成立しうるかもしれない相互交渉の空間を模索することにある。そのためには，まず，パプアニューギニアをめぐる「想像の地理」を再提示し，それを脱構築する試みからはじめねばならない。

Ⅰ.「楽園」ではない太平洋

太平洋の島々への「楽園」イメージは，いまも，国際観光の場を通じて再生産され続けている。それは，春日（1999）らが語るように，オリエンタリスト的イメージであることは間違いない。文明的で，合理的で，人工的で，男性的な，西欧世界の自己イメージを反転させれば，野性的で，感情的で，自然で，女性的な，太平洋の島々のイメージが立ち現れる。

青い海，白い砂，緑の島という舞台に，長い黒髪の無垢で性的に奔放な女性たちという，タヒチに代表される，南太平洋の場所イメージは，フィジーやニューカレドニアにも代替可能である。実は後二者は，地理的には，ポリネシアではなくメラネシアに属し，その風景も住民の容貌も異なる（フィジーの中心，ヴィティ・レブ島には白い砂浜はほとんどないし，メラネシアの女性たちの髪の毛は縮れている）。しかし，そんな現実の地理的差異は問題にされはしない。事実，これらの観光地はたいてい一冊のパンフレットの中に並んでいて，ツーリストは，パッケージツアーの値段を見くらべながら，どこに行くかを選ぶことができる。ハワイはもう飽きたから，今度は南の島にしてみよう。タヒチはちょっと高いから，フィジーにしようか。ニューカレドニアもお洒落かもしれない……という具合に。そこには固有の「場所性」は不要である。もちろんフィジーの人口にインド系住民が半分を占めることや，ニューカレドニアのメラネシア系住民たちが，フランスの植民地支配から独立する運動（カナク独立戦線）を続けていることなどは，ツーリストの想像の地理には登場しない。それらが問題になるのは，フィジーのクーデターの例のように，観光客にとって最も重要な条件である「安全」が脅かされそうになった時だけである。

しかし，そうした中で，パプアニューギニアだけはいささか様相を異にする。デニス・オルークの『カンニバル・ツアー』が描くように，ニューギニアを支配するのは，「無垢

な女性」ではなく，（ついこの間まで「人喰い人種」であったかもしれない！）「野蛮な男性」のイメージなのだ。西洋からパプアニューギニアに来る観光客は，リゾートとしての南太平洋とは異なる，エキサイティングな「秘境観光」を求めてニューギニアにやって来る。そこでは，無垢な女性が野蛮な男性の像に反転すると同時に，南太平洋の島々の穏やかで美しい海や砂浜の風景は，ジャングルに覆われて野生の動物や鳥が満ち溢れる風景に取って代わられる。

そこから浮かび上がってくるのは，次のような構図である。すなわち，太平洋の島々とその人々が，西洋の支配によって「訓化された／飼いならされた」(domesticated) 自然であるのに対し，「飼いならされていない」(untamed)，すなわち「野生のままの」(野蛮な) 自然と人々，というニューギニア像である。その場所イメージが，もし代替可能であるとすれば，それは他の南太平洋の島々とではなく，むしろアフリカやアマゾンとであろう。これらの地域がいずれもかつての文化人類学者にとって「聖地」であったことはもちろん偶然ではない。すなわち西欧文明の影響が，人々の文化や精神を完全に支配しつくしていない「辺境」がもつ魅力である。

パプアニューギニアのもつこうした文化と表象の世界における「辺境」性と，世界政治経済システムにおける「辺境」性とは，重なり合っている。もちろんパプアニューギニアが最初から「辺境」であったわけではない。以下では，パプアニューギニアにおける「辺境化」のダイナミズムを提示する。

II．東南アジアとオセアニアの間：「辺境」としての西パプア

次のような問いからはじめてみよう。東南アジアとオセアニアの境界はいったいどこだろうか？ 学校の地理の優等生なら，インドネシアは東南アジア，パプアニューギニアはオセアニアと答えるだろう。とすれば，インドネシア領の東端にあたる西イリアン（西パプア）とパプアニューギニアとの間，すなわちニューギニア島の真ん中を南北に引かれた直線が，両者を分かつ境界線ということになる。

しかし，それはそこに生きる人々のリアリティとは，およそ合致しない。ニューギニア島に住むのは，同じ身体的・言語的特徴をもつメラネシア系の人々である。植民地時代に引かれたその境界は，ローカルな人々の生活や意思と無関係に，そこに存在し，両者を分断している。オランダ領から，新生インドネシア国家による「イリアン解放」を経て，インドネシアの国土に組み込まれた西イリアンは，いわば「想像の共同体」としてのインドネシア国家を，表象としても実践としても支える空間である。すなわち，多様性の中の統一というイデオロギーの実現する空間として，人口過密のジャワ島からの開拓移民に「未開」の土地を与える「フロンティア」として，そして，フリーポート鉱山に代表される金や石油といった重要な鉱物資源を産出する経済的価値をもった土地として。

西パプアのネイティヴのニューギニア人は，自由パプア運動（OPM）を組織し，インドネシア「帝国」に対し，ゲリラ的闘争を続けている。インドネシア国家は，それに対し，

最強の国軍部隊を配置することにより圧殺し，多数の移民を送り込んで空間を侵食し，言語政策と開発政策を通じたインドネシア化を進めることで応えている。パプアニューギニアの民衆レベルでは，インドネシア側の住民に対し，同じ「民族」としての共感がある。しかし，国家としてのパプアニューギニアは，OPMへの支持はもちろんのこと，国境を越えてやって来る難民の支援にも表向きは消極的である。

ジャカルタに，インドネシア国家を表象するタマンミニ（美しいインドネシア）公園がある。そこには各州ごとにつくられたパビリオンが存在する。私が訪れた時，アスマットの彫刻や仮面などの原始美術が飾られた西イリアン館の前では，上半身裸のネイティヴのニューギニア人の男が座って，木彫りを彫っていた。訪れたジャカルタの若い女性たちが，動物園から抜け出してきた珍しい動物を目にしたかのように，はしゃぎながら彼と並んで記念写真を撮っている。男は，無表情で，何も語らずそれに応じている。

西パプアは，東南アジアの「辺境」として存在している。インドネシア国家と国民への資源の供給地として，文明の恩恵の届かぬ未開の地として，そして東南アジアでもオセアニアでもない「あわいの空間」（加藤・神田 1999），想像の地理の空白地帯として。

III. 植民地化と「ネイティヴ」の創造

ニューギニア島に人が住みはじめるのは，およそ5万年前のこととされる。氷河期の海面低下により，サフル大陸として現在のオーストラリアと地続きになっていたニューギニアに，ユーラシア大陸からマレー諸島（当時のスンダ大陸）を経て人が渡ってきた。島の内陸部からは，およそ9000年前の農耕遺跡が発掘されており，農耕の歴史はヨーロッパより古い。

ヨーロッパ人が初めてニューギニア島の土を踏むのは，16世紀初めのことである。しかし，その後植民地化がはじまる19世紀後半に至るまで，この地に西洋人の植民が試みられることはなかった。これは，18世紀末にはロンドン伝道教会による本格的な布教が開始されるポリネシアに比べ，明らかに遅い。その背景には，両者の地理的環境の差異と，それに結びついた西洋人による表象と実践の差異が横たわっている。

気候が比較的穏やかで，風土病も少ないポリネシアに比べ，ニューギニア島にはマラリアが存在した。これがヨーロッパ人の植民を阻む最大の要因だった。海岸部にも人が居住可能な平地は少なく，一歩内陸に入れば低湿地が広がり，熱帯林が行方を阻んだ。中央部の急峻なニューギニア山系は近づきがたい奥地であり，そこに集約的な焼畑農耕に基づいた稠密な人口（ニューギニア高地人）が存在していることは，1930年代に入るまで知られぬままだった。

首長制が存在し，支配体制が明確だったポリネシアとは対照的に，ニューギニアには，広範な地域を統合する権力は存在しなかった。したがって，在地権力との交渉によって統治を容易にする方法も取りえなかった。ニューギニア島の海岸部と低地の人口密度は低く，人々はタロイモなど根栽類の焼畑農耕と採集狩猟を生業に生活を営んでいた。西洋人にと

って苛酷な自然環境の中に，小集団が散在していたことにより，接触しにくく，理解しがたく，手なずけにくい「野蛮」で「敵対的な」パプアニューギニアの「ネイティヴ」のイメージが形成された。

そこには，さらに人種主義の問題が加わる。モンゴロイドで明るい褐色の肌をもつポリネシアの人々に比べ，オーストラリアのアボリジニと同じオーストラロイドに属する，黒い肌をもつニューギニア人の外観は，物質文化の落差も手伝って，西洋人に共感を呼び起こしにくかった。タヒチ人は「高貴な野蛮人」となりえたが，ニューギニア人は「本物の野蛮人」でしかなかった。

1884年，イギリスが東部ニューギニア島の南半分を，ドイツが北半分と周辺の島々の領有を宣言し（西部ニューギニア島は，1828年，すでにオランダにより領有宣言がなされている），現在のパプアニューギニアにあたる領域の植民地支配がはじまる。植民地化は，海岸部や島嶼部から徐々に進められた。この植民地化は，オーストラリアやニュージーランドとは異なり，西洋人による植民を主たる目的とするものではなかった。ドイツ領となった北部ニューギニア島や島嶼部で熱帯作物のプランテーション経営は行われたものの，植民者にとって定住しにくいニューギニアの土地は，それほど魅力的な価値をもたなかった。

植民地政府は，植民者による原住民からの土地の購入を禁じ，植民地政府だけを唯一の購入者とした。これはニューギニア人と土地との結びつきを維持しようとするものだった。原住民労働条例により，プランテーション等で働くニューギニア人労働者の契約期間は3年以内と定められ，契約期間を終えた労働者は雇い主の手で村に帰すことが義務づけられた。労働者や，家事使用人などとして一時的に滞在する者を除き，都市空間へのニューギニア人の居住は原則として認められなかった。それは，原住民が土地を失ってプロレタリアート化することを防ぎ，再生産の場を村に置くことによって，植民地経営のコストを最小限に止めておこうという戦略であった。そこにはニューギニア人を，土地と結びついた，動かぬ「ネイティヴ」として見なそうとする植民地統治者の表象と実践が作用していた。

しかし，実際には，後に見るようにパプアニューギニアの人々は，ローカルな空間の中で孤立して，動かずに生活してきたわけではなかった。重要な生業である狩猟を，人口密度が低い土地で，効率的に行おうとすれば，一所への定住は理にかなわない。また部族間の戦争は，絶え間ない集団と領域の再編をともなうものだった。

未開のパプアニューギニアを「文明化」する実践は，キリスト教の宣教師たちと，ピジン語で「キアップ」(kiap) と呼ばれる植民地政府の巡視官（パトロールオフィサー）の手で進められた。植民地政府は，辺境の人々を統治下に組み入れるにあたって，まず駐在所（パトロールポスト）を設け，周辺の部族との「接触」(contact) とその「平定」(pacification) を進めていった。最初の接触のプロセスは，場所と状況により若干の差異はあるものの，おおむね似通っていた。すなわち，銃火器の威力の誇示と威圧，塩や煙草，腰巻といった西洋の消費物資の贈物による懐柔，という両面作戦である。それは，西洋のもつ圧倒的な「力」――物理的な暴力と「富」――の優位性を，パプアニューギニアの人々に見

せつける儀式であった。

しかしながら，この「接触」は，もちろん，パプアニューギニアの人々にとって，最初からすんなりと，理解可能なものとして受容されたわけではない。むしろ，後に提示する事例が物語るように，多くの場合，それに引き続く，植民地権力の側からの剝き出しの暴力の行使とそれによる服従の強要をともなうものでもあった。

植民地支配からの独立の過程は，このようなパプアニューギニアの土地と人々をめぐる支配の実践と表象，それと結びついたグローバルな主体と，ローカルな主体の双方による「空間の仕切り直し」にいかなる変化をもたらしたのだろうか。それが次に検討する課題である。

IV. ネイションのない国家？
——「パプアニューギニア」の誕生とブーゲンビルの「辺境」化

パプアニューギニアといえば，熱帯林に群れる極彩色の鳥や蝶たちという，原色の自然のイメージがある。しかしそれ以上に，パプアニューギニアは，多様な民族・文化に彩られた国である。パプアニューギニアの言語の数は，700とも800ともいわれる。総人口は，2000年現在で500万人だから，一言語集団当たりの平均人口は6000～7000人ということになる。最大の言語集団であるエンガでも，その数は10万人を超える程度であり，パプアニューギニアという国家には「多数派」の民族—言語集団は存在しない。いわばすべての民族集団がマイノリティの地位にある。

パプアニューギニアという国家が生まれるのは，1975年のことである。国連の勧告に宗主国オーストラリアが従った結果「与えられた」独立だった。初代首相となり，現在3度目の首相の座についているマイケル・ソマレらによる独立運動は存在したものの，支持者は一部の都市のインテリに限られた。いわば植民地政府公認の独立運動であり，「国民」全体への広がりと熱気はもちあわせなかった。それどころか，パプアニューギニアという国家の形成を特徴づけるのは，独立への動きと同時に，各地にそれ以上の勢いで「反独立」運動が燃え上がったことである。

その最大のものがブーゲンビル島の分離独立運動である。これ以外にも，ニューギニア島南海岸（オーストラリア領パプア）の，パプア・ベセナ（パプア分離）運動，高地地方の「高地前線」と称する学生たちの運動，イーストニューブリテン島で起こったラバウル周辺のトーライの人々によるマタウンガン運動，などが存在する（May 1982）。これらの運動の背景，スローガン，組織の内実はそれぞれ異なる。パプア分離運動は，かつてイギリスの植民地だったニューギニア島東南部が，旧ドイツ領のニューギニア島東北部・島嶼部に比べ，開発が遅れていたため，その格差を残したままの独立に反対する人々によって起こされた。高地の学生たちの運動も，植民地化が遅く，遅れた高地地域にとって，独立は時期尚早というものだった。逆に，マタウンガン運動の担い手となったトーライの人々が住むニューブリテン東部は，最も早くから植民地化の影響を受け，プランテーション開発

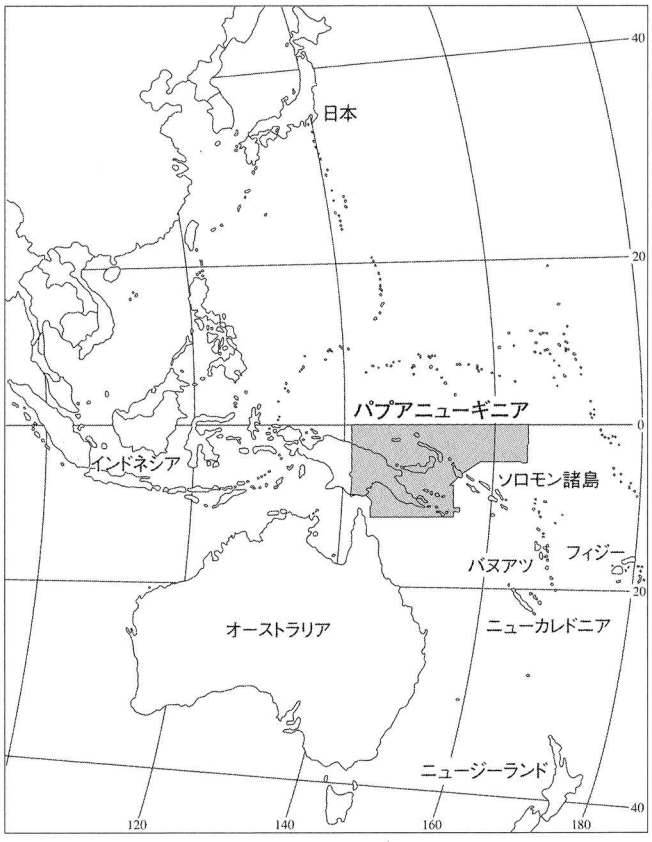
も進み，教育水準も高い，パプアニューギニアの中では相対的に「先進地域」だった。しかしそれゆえに，60年代から反植民地運動が生まれた。トーライの人々は，「遅れた」本島の人々と一緒に国を作ることを好まず，分離独立を求めた。

ブーゲンビル島の分離独立運動の背景は，植民地化初期にさかのぼる。ブーゲンビル島は地理的にも言語・文化的にも南のソロモン諸島と連続性をもつ（地図参照）。国境線を取り去った地図を眺めると，ブーゲンビル島は，ソロモン諸島という艦隊を従えて海を進む旗艦のようにも映る。1884年，ソロモン諸島とブーゲンビル島は，ともにドイツの植民地となる。しかし1899年に，両者の運命は分かれることになる。イギリスがサモアから手を引くことを条件に，ソロモン諸島の帰属権をドイツがイギリスに譲り渡したのである。イギリスの植民地となったソロモン諸島はひとつの独立国となる。しかしブーゲンビル島だけは，当時のドイツ領に残り，独立時には，パプアニューギニアの「辺境」として国家の中に組み込まれることになった。

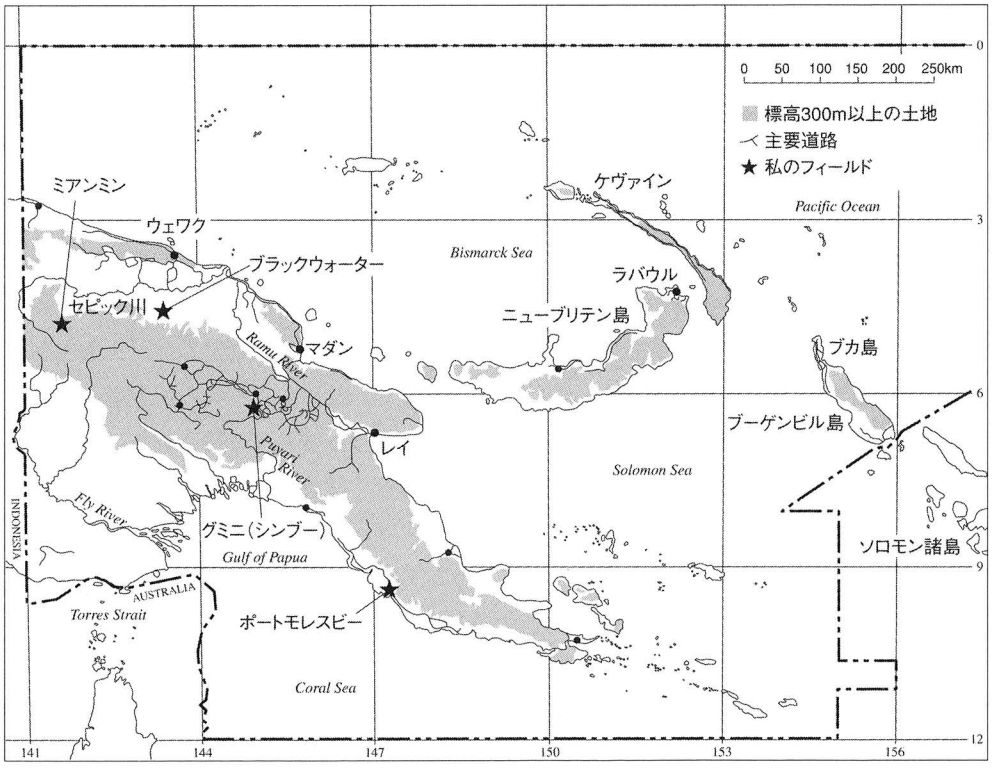
ブーゲンビルの人々は，パプアニューギニアへの帰属問題をめぐる住民投票の実施を要求した。しかし，植民地政府はこれを認めなかった。1975年９月，パプアニューギニアが正式に独立する２週間前，ブーゲンビルは「北ソロモン共和国」として自ら独立を宣言し，国連に提訴した。しかしこの独立は，国家の集合体である国連からは支持を得られなかった。新たに独立したパプアニューギニア政府との間で，ブーゲンビルに州政府を置き，一定の自治権を認める協定が結ばれる。これは双方にとって妥協的なものであり，ブーゲンビルの人々の自決権を満足させるものともならなかった。州政府を基盤とする地方分権的な制度は，パプアニューギニア全体に拡大されたが，大半の州では人的資源も政府の運営方法も未熟なまま，実質的に破綻していく。この仕組みは，民族／言語的・地域的多様性を抱える新興独立国家パプアニューギニアの，国（ネイション）としての凝集性をますます弱める結果となった。

ブーゲンビルにとってのもうひとつの「悲劇」は，やはり植民地時代の1960年，この島で，膨大な埋蔵量をもつ銅鉱脈が発見されたことである。まもなくオーストラリア資本の企業，コンジンク・リオテント社による試掘がはじまり，1972年に本格的な操業が開始される。植民地政府は，ブーゲンビル銅山の開発に合わせて鉱山法を制定した。その内容は，地元民の土地権は地下までは及ばないというものだった。これにより銅の採掘権とその利潤は地元のブーゲンビルの人々から奪われた。それに代わって人々に残されたのは，掘り崩され見る影もなくなった祖先からの山と，屑鋼で黄色く汚染された川だった。新興独立国パプアニューギニアにとって，この銅山がもたらす収入は，国家歳入に不可欠なものであり，それを手放すことはありえなかった。こうして植民地時代に，宗主国同士の取引によって決まった領域を仕切り直そうという最初の試みは失敗に終わった。

ブーゲンビルの人々の積年の思いが再び顕在化するのは，1988年，採掘権料の改定を行う交渉の場においてだった。そこで地権者たちは，200億キナ（当時の換算率で２兆円以上）という，莫大な採掘権料を会社側に要求する。そこには，これまで人々が失ってきたかけ



パプアニューギニアの地政学的位置と私のフィールド



がえのないものたち――祖先の山・川といったローカルな風土――への賠償請求という意味が込められていた。この「理不尽な」要求は，当然，鉱山会社によって拒絶される。交渉は暗礁に乗り上げ，ブーゲンビル銅山会社の元職員でもあった，若い地権者のフランシス・オナの率いるグループ（後に「ブーゲンビル革命軍」Bougainville Revolutionary Army：ＢＲＡと名乗る）による銅山施設の爆破と，鉱山の操業停止という事態へと展開する。そしてＢＲＡは，２度目のブーゲンビル独立宣言を行う。

パプアニューギニア政府は，この事態を収拾するため，ブーゲンビルに軍隊を派遣した。しかしジャングルに身を隠しゲリラ化したBRAの活動を押さえ込むことはできず，ブーゲンビル島を海上封鎖し，外部からの物資を一切遮断する手段に出た。この海上封鎖は1990年から４年以上の間続き，食糧や医薬品の不足などで，乳幼児を含む多くの島民が犠牲になった。政府軍の攻撃による死者と併せた島民の犠牲者は２万人に及ぶといわれる。これは総人口の１割を超える。

このブーゲンビル紛争は，その犠牲者の規模からいっても，世界的に注目を集めるに値する事件であった。紛争中には，パプアニューギニア軍が国境を越えてソロモン諸島に入り込む事件も起こり，パプアニューギニアとソロモン諸島の国家関係が一時緊張する場面もあった。そこには，狭い海峡を隔てたソロモン諸島側の住民が，ブーゲンビルの人々に同情し支援しているとの疑心があった。しかし，人道上の問題としてこれを批判したり，緊急医療援助を行ったりするNGOなどの活動を除いては，紛争の早期解決のための国際的な圧力は弱かった。それが「周辺」の「周辺」で起こった出来事であったことが，西欧先進世界の想像の地理あるいは地政学に訴えかけなかった理由のひとつであろう。しかし，同じオセアニアの大国の中でも，何度も調停に動いたニュージーランドに比べれば，オーストラリア政府は紛争解決に積極的な態度をとらなかった。そこには，銅山会社がオーストラリア資本であったことに加え，パプアニューギニアという国家（state）の維持にとって銅山収入が不可欠であった，という，パワーポリティクスが作用している。「辺境化」されたブーゲンビルの人々が試みた空間の「仕切り直し」は，皮肉にもナショナルな求心性をもたないパプアニューギニアという国家（とそれを支える国家間システム）によって，再び暴力的に押さえ込まれたのである*1。

以下では，植民地化を含むグローバリゼーションにともなうローカリティの変容をより鮮明に語るために，私自身がフィールドワークを行った３つの場所を取り上げる。そこでは，「辺境化」／「周縁化」と，「ネイティヴ化」の構造的プロセスがいかなるものなのか，またローカルな人々が，それにいかに抗い，同時にまた，それを身体化しつつ受容しているのかを示すことになる。さらに，「ネイティヴ」とされる人々の移動への志向とその経

＊１　2001年１月，ようやくパプアニューギニア政府との間に和平協定が締結された。それによれば，軍隊と外交権はパプアニューギニア政府に委ねるが，独自の警察，司法，税制などをもつことを定めた自治政府の発足が決まり，島内から軍隊は引き揚げることになった。しかし，その帰属を決める住民投票の実施は10年後のことである。

験，言い換えれば「旅」の実践（クリフォード 2002）についても，語ることにしよう。

V．Scene 1　辺境における西洋世界との出会いと「旅」
――ミアンミンの人々の場合

ミアンミンの人々は，パプアニューギニア高地周縁部，西セピック州から東セピック州にまたがる地域に住んでいる。領域は標高1000メートルから数十メートルにまでおよび，高低差が激しい。総人口は約2000人，人口密度は1平方キロメートル当たり1人にも達しない。集落は，広大な領域に散在し，その規模も200人に満たない。人々は，現在もタロイモの移動耕作と狩猟を生業としている。領域には手つかずの熱帯林が広がる。パプアニューギニアの中でも，海岸から到達可能な地域では，近年原木輸出を目的とした熱帯林の伐採が行われている。しかしミアンミンの人々の住む空間は，こうした熱帯林開発さえ届かない奥地である。

外部からミアンミンの人々の領域に入るには，小型飛行機によるしか手段がない。海岸の町ウェワクから単発の飛行機でおよそ1時間，広大なセピック川の湿原を越えると，行く手には山々が見えはじめる。着陸のため高度を下げた窓から樹木の一本一本が手に取るように見えるようになる。すると，その樹林の間に，突然一筋刷毛で刷いたような空間が出現する。これがミアンミンの領域の北端，最も低地に位置するホットミンの村の飛行場である。ミアンミンの領域内には，全部で4つの飛行場が存在する。飛行場といっても，それは，森を切り開いて草地として，飛行機の発着を可能にしただけの簡素なものである。私が訪ねた当時，ホットミンの飛行場には，待合室となる小屋も，無線機もなかった*2。こうした飛行場は，パプアニューギニア全土に多数存在する。その大部分は，教会によって，布教に必要な物資を運ぶ目的で作られたものである。しかし，ここでは，それを作ったのは，ミアンミンの人々自身だった（熊谷 1988）。

彼（女）らがなぜ自らの手で飛行場を作るに至ったのか。そこには，ミアンミンの人々と西欧世界との接触の過程と，それにともなうローカルな人々が作り出した「想像の地理」が関わっている。

ミアンミンの人々は，もともと「動く人々」だった。植民地以前から，彼らの間でいかに移動が活発だったかは，オーラルヒストリーによってうかがい知れる。集落は早ければ数年程度で移転を繰り返していた（熊谷 1989a）。その最大の理由は狩猟の効率性であり，一所に長く留まっていると周囲の獲物が減るからである。原因不明の（多くは邪術の仕業と解釈される）死者が続いた時なども，その場所を離れた。狩猟のための遠征では，20～30キロメートルもの距離を移動する。

＊2　ここでの記述は，1984，86，88年に私がそれぞれ数週間から数カ月，この地に滞在した際の知見に基づいている。2001年に短期間再訪した時には，ホットミン村の人々は無線機を入手していた。これは，ミアンミンの領域に隣接するフリエダ川の銅山開発を進める企業によって，土地権に関わりをもつ周辺の部族に対し，寄贈されたものだった。

ミアンミンの人々が定住するようになったのは，植民地政府との接触以降のことである。パトロールのたびに彼らの居所を探し当てるのに苦労する巡視官が，それを命じたからだという。植民地政府との接触以前，彼らは，周囲の民族集団との抗争を続けており，とりわけ狩猟動物の豊富な低地の，より弱小な集団への苛烈な襲撃を繰り返しながら，その支配領域を拡大していた*3。そこには，「ネイティヴ」＝「その土地に根ざした／動かない人」という定式化はまったく当てはまらない。むしろ，彼らにとって移動することが，自らの生き方そのものであったといってよい。

こうした彼らの空間的・社会的なダイナミズムを奪ったのは，植民地政府との接触であった。ミアンミンの人々と植民地政府の巡視官との最初の接触は，1950年のことである。しかし，これには前史があった。1938年，テーラーとブラックの２人が率いて，当時未開地域であった，西部高地のマウントハーゲンからテレフォミンを経て，セピック川の上流から川を下るという大遠征（ハーゲン・セピックパトロールと称される）を行う（Taylor 1971)。それまで平和裏に進行したこの旅は，12月テレフォミンから北上し，ミアンミンの領域に入ったところで，弓矢を持ったミアンミンの戦士たちに急襲され，原住民の運搬人１人が死に４人が負傷する。この事件は，植民地政府のミアンミンの人々に対する「野蛮で好戦的な部族」というイメージを固定化する出来事となった（熊谷 1988)。

植民地政府との接触後の1956年末，ミアンミンの人々の運命を決定づける事件が起こる。ミアンミンの男たちが，２回にわたり，隣接するアトバルミンの人々の村を襲い，あわせて20人の村人を殺害したのである。植民地政府は，「接触」と同時に，統治下での部族間戦争を禁じていた。したがって，ミアンミンの男たちのこの実践は，植民地政府の命令に背くものだった。しかし，この事件の発端は，実はその数カ月前に，部族戦争は終わったとの植民地政府のメッセージを信じて，ミアンミンの男たちが，かつての戦争相手で妻を略奪してきたアトバルミンの村を訪れたことにあった。仇敵の来訪にアトバルミンの男たちは，彼らを殺害してしまう。ミアンミンの男たちの襲撃は，その報復攻撃だった(Morren 1986)。つまり，彼らは，植民地政府によってもたらされた「平和」の犠牲者だったことになる。

この事件に対し植民地政府は，ミアンミンの人々を一方的な加害者とみなす。そして，翌年１月から160人の大部隊をミアンミンの領域に送り込み，25人の男を捕らえる(Neville 1956 ; 57)。捕らえられた男たちは，駐在所のあるテレフォミンで取り調べを受けた後，飛行機でウェワクに送られ，裁判にかけられる。彼らはそこでいったん死刑を宣告

＊３　この襲撃は，男たちを皆殺しにし，女性と子供を連れ帰り，女は自分たちの村の男に娶らせ，子供は村で育てるというものだった。単位集団の規模が小さく，姉妹婚を原則とするミアンミンの人々にとって，集団の再生産はこうした方法によって支えられていた。私が1984年にはじめて，ホットミンの村を訪ねた時，村の年配者の中には，このようにして連れてこられた別の部族出身の男女が存在していた。年配の男の一人は，村のリーダー格であり，出自を異にするための差別は見出せなかった。しかし，肉親を殺した人々に育てられた人たちの真情を，私自身が聴き取ることはできなかった。

されるが，西欧法の意味における殺人者とはいえないという理由で懲役刑に減じられ，ウェワクで4年間服役生活を送る。彼らは飛行場の草むしりをさせられ，そこでピジン語を覚える。刑期を終えた男たちから4人の若者が選ばれ，北部海岸の町マダンに送られて，ルーテル教会の学校で教育を受ける。村に帰った若者たちは，村人にキリスト教やピジン語を教える。しかし彼らが村で行ったのはそれだけではなかった。その最大の事業は，飛行場の建設だった。

飛行場建設の中心となったのは，アムセップという男だった。彼はマダンから戻った後，さらにテレフォミンのバプティスト教会で学び，村に帰って牧師となる。彼の指導の下に，ミアンミンの人々が協力して，手作業で森を開き，整地をして，飛行場を完成させたのだった。最初に，建設中のこの飛行場を発見した政府のパイロットは，これを教会の指導によるものと信じ，テレフォミンのバプティスト教会に伝えた。これを空から視察した教会関係者は，その出来栄えに驚いて，この飛行場に着陸を試みたという（Morren 1986）。

ここに物語られているのは，ミアンミンの人々による想像の地理の形成とそれによる実践である。彼らの行いは，少なくとも外見上は，植民地化以降，メラネシア一帯に燎原の火のように広がったカーゴ・カルトと呼ばれる宗教運動の図式によく似ている。圧倒的な西洋世界の物質的「富」を前にして，自らの物質文化との落差を，キリスト教的な物語を借用しながら解釈し実践するのがこの運動の特徴である。祖先の預言を受けた者の言葉に従って，西洋の物資（カーゴ）を満載した船（内陸部では飛行機！）が自分たちの所にやって来ると信じ，祖先から伝わった呪物や慣習を廃棄したり，規律に従った実践を繰り返す。それは時には反植民地的な運動へと展開することもあったが，基本的には伝統的な慣習や文化に対し，より多くの物質的富をもたらしてくれる西洋人の力と観念の優位を認め，その実践を「模倣」しようとするものだった。

ミアンミンの人々の実践の中で注目すべきは，彼らの飛行機への執着である。1949年の植民地政府の巡視官のレポートには，ひとつの興味深い挿話が紹介されている（Rogers 1949）。それは，まだミアンミンの人々と植民地政府との接触が行われる前，一足早く統治下に入っていたテレフォミンからミアンミンの男たちによって誘拐され，逃げ戻った女の証言である。ミアンミンの男たちは，彼女になぜ「飛行機」が繰り返しテレフォミンに向かって飛ぶのかを，しきりに尋ねていたという。

ミアンミンの人々は，植民地政府との接触以前から，頭上を行く飛行機に視線を向けていた。裁判を受けるためウェワクに護送されて行った時，服役中に飛行場の草むしりをさせられていた時，プランテーション労働者としてラバウルやニューアイルランドに出かける時，飛行機は常に彼らの眼差しの焦点にあった（熊谷 1988）。それは，外部の富をもたらしてくれる存在であると同時に，彼ら自身がそれによって空間を越えて移動し，「旅」する手段でもあった。

ホットミンの村でも，1959年にまったく同様の事件が起こり，多くの村人がウェワクで服役している。刑期を終えて村に戻った人たちは，伝統的な衣装ではなく，鉄斧や腰布な

どの新たな品々を身に付けていたという。彼らが，自ら進んでプランテーションに出かけるのは，それから数年後のことである。1979年に，ホットミン村からまとまってプランテーションに出かけた男たちは，巡視官による募集に応え，4日間歩いて集合場所まで行った。それから，飛行機を2回乗り継いで，ブカ島（北ソロモン州）のプランテーションに行って働いたという。

「動く人」であったミアンミンの人々が，植民地政府の統治下に置かれることによって，自ら動くことを制限され，空間の仕切り直しのための戦争は禁じられた。彼らは「飼いならされた」ネイティヴであることを求められた。ローカルな空間がそのダイナミズムを失う一方で，彼らにとってより魅力的な場所は，飛行機に乗って到達する彼方にあった。

はじめてホットミンの村に滞在していた時のことだ。私は何カ月か後に迎えに来るはずの飛行機を心待ちにしながら，単身でのフィールドワークの心細さを耐えていた。そんな昼下がり，よく飛行機の爆音が近づいてきた。「こっちに来るのでは？」，飛行機が自分をここから連れ出してくれるかもしれないという思いに駆られた私の問いに，村人は表情を変えずに答えた。「あれはテレフォミンに行く飛行機だ」。ウェワクとテレフォミンの間には，週に何度か定期便が通っている。村人は，（何カ月かに一回）村に降りてくる飛行機と，ただ頭上を通り過ぎていく飛行機の爆音をけっして聞き誤ることはなかった。

ホットミンの村には，プランテーションに行った男たちが村に作った，小屋がけの商店があった。そこには，剃刀の刃や煙草，マッチ，石鹸といったささやかな日用品が並んでいた。日常的な現金収入の道がないこの村で，商店経営は，「模倣」以上の意味をもたない。村人の手持ちの現金が次第に底をつき，商品を買うことも，仕入れに行くこともままならぬまま，高地周縁部特有の毎夜の豪雨に打たれた小屋は朽ち果てようとしていた。

VI. Scene 2　日本兵と秘境観光：「旅人」に眼差される人々
――ブラックウォーターの場合

ブラックウォーターへは，セピック川中流のアンゴラムの町からモーターカヌーで1日の道のりである。広大なセピック川を離れ，支流のコロサメリ川から，ブラックウォーターの水路に入ると，泥炭湿地特有の黒く澄んだ水に変わる。ブラックウォーターの名前の由来である。やがて視界が開け，野生の水鳥が群れ，舞い集う，美しい湖が現れる。湖を囲んで，カプリマンと，カニンガラの人々の村がある。

カプリマンの人口はおよそ1200人，6つの村がある。カニンガラの人々は500人で，2つの村に分かれている。ブラックウォーターに暮らす人々の生業活動は，サゴヤシ澱粉の採集と漁撈・狩猟である。村の周囲の湿地林に自生するサゴヤシを切り倒し，中身を叩いてほぐし，そこに含まれる澱粉を水で溶かし出す。そうして採取した澱粉は固めて保存し，焼いたり，湯で溶いたりして食べる。湖の漁業資源は豊富であり，人々はほぼ毎日，魚を食卓にのぼらせることができる。

ブラックウォーターに住む人々も，移動の歴史をもっている。私は，ブラックウォータ

ーに住むカプリマン，カニンガラの人々と，その南に位置するアランブラックの人々の村を訪ね，移住伝承を尋ねた。すると，これら3つの集団の移住の物語はかなり重なり合っていて，かつては，3つの集団の社会的・空間的境界はもっと流動的だったことが想像された（Kumagai 1998）。ミアンミンの人々と同様，これらの集団はいずれも，より標高の高い地域から，徐々に低地に下りてきていた。その理由も，低地の方が，サゴヤシ，魚，狩猟動物といった資源が豊富なためだった。

ブラックウォーターの人々と植民地政府との最初の接触は，1930年のことである。ここでもミアンミンの人々と同様の事件が起こっている。接触の数年後，コロサメリ川の人々を襲撃したという罪で，カプリマンの村人5人が捕らえられ，ラバウルに送られ死刑の宣告を受けた。彼らは，わざわざ故郷の村に戻され，そこで近隣の村から集まった大勢の人々が見守る中で絞首刑に処せられた（Townsend 1968）。

ブラックウォーターでも，植民地政府による部族間戦争の禁止と定住の促進は，ローカルな社会と空間の流動性と仕切り直しの機会を奪うものとなった。ローカルな空間は，カプリマンやアランブラックといった「民族集団」あるいは村落レベルで固定化され，領域性をともなう集団原理が支配的となり，人々の集団への帰属もまた固定的なものとなっていった。すなわち，植民地統治の結果，民族集団が「創られた」のである（熊谷 2000）。

ブラックウォーターの人々が，植民地政府に続いて遭遇したグローバルな力は，第二次世界大戦だった。戦争末期の1945年，日本兵たちが，この地にやって来たのである。食糧の補給を断たれた日本軍は，現地での食糧調達の可能性を探るという目的で，部隊をセピック川とその南部支流域へと送った。生還した元日本兵からの聴き取りによれば，彼らがブラックウォーターの村々に駐留したのは，1945年の3月頃から，最終突撃の命令が下る7月までの，わずか数カ月間のことだった。しかしブラックウォーターの村人たちは，それを数年にわたる出来事のように記憶している。

カプリマンの村人から私に語られた日本兵の思い出話は，名前からはじまった。村人は，50年を経ても，自分たち，あるいはその父親たちが関わり，面倒を見た日本兵の名前を語り継ぎ，記憶していた。そして日本語（ヤシ，ブタ，ワニ，ヤスメ，キヲツケ，ゴクローサン，アリガト，トウキョウ……）の数々，日本兵から教わった民謡や唱歌が再現された。

日本兵との「共同生活」では，楽しかった思い出も語られた。手品のうまい兵隊がいて，皆を驚かせたこと，村人と同じ衣装を着け一緒に踊ったこと……。そこには，私自身が日本人であることへの気配りがあったことはいうまでもない。しかし，人々の語りが収斂していったのは，日本兵たちの面倒を見るための自分たちの努力と労苦の大きさだった。村人は日本名で呼ばれ，あるいは番号を割り当てられ，当番制で決められた兵隊の世話をした。自分たちが一生懸命食糧を集め，面倒を見たおかげで，日本兵は皆生きて帰ることができた，と彼らは語る。こうした村人たちの語りには，自分たちの労苦が，今も報われていないという思いがある（熊谷 2000）。

日本兵たちは，最初に村にやって来た時，次のように「約束」した。もし日本が勝った

ら，お前たちにいろいろなサービスを持ってきてやる，日本人がたくさんニューギニアにもやって来る，ニューギニア人も日本や東京に行けるようになる……と。

ブラックウォーターの人々が日本兵を助けたのは，もちろん日本兵の持つ銃の力によるものである。しかし，自分たちの村に突然転がり込んできた「旅人」の物語を信じ，期待もしたはずだ。しかしその「約束」は，日本の敗戦によって，水泡に帰してしまった。

ブラックウォーターの人々の，日本をめぐる想像の地理を考えてみる。彼らは，自分たちが目にする，セイコーの腕時計や，サンヨーのラジカセ，ヤマハの船外機が，皆日本製であることを知っている。そして戦争に敗れた日本が，戦争に勝ったオーストラリアよりも，経済的に発展していることを承知している。しかし日本兵を助けた自分たちの村には，サービスは与えられないまま，開発からは取り残されている。日本は自分たちへの「負債」を返そうとはしていない。

ブラックウォーターの人々が，現在，日常的に出会い続けているグローバルな力が，もうひとつある。それは，セピック川流域を「秘境観光」に訪れる，外国人ツーリストたちである。

セピック川には，トランスニューギニーツアーという会社が扱う，「セピック・スピリット号」という客船でのクルーズがある。これは，パプアニューギニアまでの航空運賃を別にして，数十万円はかかる，バックパッカーの若者などには縁がない豪華ツアーである。オーストラリアやアメリカ，ヨーロッパなどからやって来た，年配者も多いツーリストたちは，船内で宿泊し，３食を供され，昼間は小型のモーターボートに乗って，ブラックウォーターをはじめとするセピック川支流の村々を訪ねる。ブラックウォーターが周遊地に選ばれるのは，自然の風景が美しいことに加え，セピック川本流域ではもう見られなくなってしまった，「本物の」精霊堂（ハウス・タンバラン）が残っているからだ。ブラックウォーターの村の中には，観光資源として，新たに精霊堂を再建したところもある。

私がブラックウォーターの村に滞在していた時，週に１回，決まった時刻にツーリストが村に現れた。その時刻になると，村全体が何となくそわそわした雰囲気に包まれる。村人はＴシャツ，短パン，ワンピースといった日常服を脱いで，上半身は裸，腰蓑をつけ，化粧をし，羽飾りをつけて，ツーリストがやって来るのを待ち構える。

ツーリストたちは，十数人程度の小グループで，皆カメラをぶら下げてやって来る。村人が演じる踊りを鑑賞した後，精霊堂を見学し，その床下に「展示」してある仮面や動物の姿をした木彫りの数々を見て回る。それは，もはや神話や儀礼とのつながりを失い，土産物として作られたものである。しかし，村人の期待の目をよそに，ツーリストたちは大概は何も買わずに，30〜40分ほどで引き揚げていく。

ツーリストが帰った後の村では，精霊堂の中で，男たちが口々にツーリストに対する不満をぶちまける。この「秘境観光」への彼らの思いはアンビヴァレントである（熊谷2000）。木彫りが売れることを期待する一方で，ツーリストによる値引き交渉には応じようとしない。値切られることは，自分がこれだけの価値があると信じている木彫りにケチ

をつけられることを意味する。それは，作り手と製品が切れていない，すなわち完全に「商品化」していないということでもある。村人は，ツーリストの来訪を期待する。そこには，ささやかな現金収入を与えてくれる存在としての期待ばかりでなく，この「旅人」たちともっとコミュニケーションをしたいという欲求も含まれている。しかし，彼（女）らは，「ネイティヴ」の真正な文化を演じることを期待され，一方的に眼差され，カメラを向けられるばかりであり，ツーリストとの対話の機会は存在しない。この秘境観光のシステムの中で，ブラックウォーターの人々が期待されているのは，博物館のショウケースの中に陳列された，物言わぬ，時間的にも空間的にも「動かぬ」ネイティヴの役回りである。この非対称な力が支配する空間を仕切り直す力は，彼らに与えられてはいない。

Ⅶ. Scene 3　首都ポートモレスビーにおけるローカリティの揺らぎ
――「都市美化」の中のシンブー人移住者集落

パプアニューギニアの首都ポートモレスビーは，人口25万人（2000年センサス）。アジアの大都市に比べれば，小さな田舎町にすぎない。しかし，ニュージーランドを除く太平洋島嶼国の中では，フィジーのスバと並ぶ大都市である。辺境の村から戻ってきた時のポートモレスビーは，たとえ太平洋島嶼国中最も治安が悪いと定評のある町とはいえ，居心地の良いホテルから，日本料理屋まである，都市的な魅力を備えた大都会である。

パプアニューギニアをはじめとする太平洋島嶼地域では，植民地化以前に，都市という空間は存在しなかった。言葉を換えれば，都市の経験は，すなわち植民地空間の経験であり，西洋文明の体験でもあった（熊谷・塩田 2000）。

私は，院生時代から，農村から都市に出て来た人たちによって作られた掘立小屋集落を，自らの調査研究の対象としてきた。こうした集落を，パプアニューギニアでは「セトゥルメント」と通称する。ポートモレスビーのセトゥルメントは，出身地を同じくする人々の集団（ピジン語でワントック wantok と呼ばれる。語源は one talk，すなわち同じ言葉を話す人々の意味）がいくつか集まって作られていることが多い。

ワントックは，西洋人によって作られた都市という異空間の中で，人々が生き延びていくセイフティネットとして再編された関係性であり，その範域は自在に伸縮可能である。雇用と居住の場という都市の希少な資源を獲得する上で，ワントックのネットワークは重要な役割を果たしている。西欧人のために，西欧流の様式で作り出された都市空間に，セトゥルメントが増殖していくプロセスは，パプアニューギニアのローカルな人々からの都市空間の仕切り直しの実践としても捉えることができる。

ポートモレスビーにおけるセトゥルメントの形成は，第二次世界大戦直後にさかのぼる。第二次世界大戦は，それまで隔離されていた，植民者とパプアニューギニア人を結びつける契機となった*4。日本軍に占領されたラバウルやレイに対し，直接の戦闘を免れ，オーストラリアとの距離も近いポートモレスビーは，大戦後，両地域を統合する行政の中心となった。都市機能の増大は，市街地の拡大や住宅・道路の建設をもたらし，それにとも

なう建設需要が，周辺の村落から人々をひきつけた。

しかし，こうした変化にもかかわらず，植民地空間としてのポートモレスビーの制度的構造は変わらぬままだった。ネイティヴのパプアニューギニア人は，都市住民ではなく，あくまで一時的な滞在者としてみなされ続けた。建設現場の飯場や，使用人住居に収容されていた人々は，空き家となった建物を占有したり，新たに空閑地に掘立小屋を建て，住み着くようになった。これが，セトゥルメントのはじまりである（熊谷 2001a）。

政府はこれまで，こうしたセトゥルメントを基本的に放置してきた。立ち退きを要求もしなければ，逆に公認してインフラやサービスを提供することもなかった*5。セトゥルメントは，都市空間にありながら，いわば不可視の存在となってきた。

私が訪ね続けてきたのは，ポートモレスビー郊外にある，ラガムガあるいはシックスマイルダンプと呼ばれる，高地地方のシンブー出身者のセトゥルメントである。このセトゥルメントは，その名の通り，市の大きなゴミ捨て場の奥に位置している。廃物が散乱し，燃えかけのゴミの煙と異臭がくすぶる中を通り抜けると，集落が現れる。家々は，三方を丘陵に囲まれた中に散在している。集落の戸数は，1980年には100戸に満たなかったが，現在では250戸を超えている。家々は，中古の木材を骨組みに，外装や屋根にはトタン板を貼り付けている。狭小で窓も少ない家が多い。電気はなく，水道は共用の水道栓が一つあるだけである。こうした住宅の様式や，インフラの未整備と都市的サービスの欠如という状況は，私がこの集落を訪ねはじめた1980年以来，まったく変わっていない。

シックスマイルダンプ・セトゥルメントの住民は，ほぼ全員が，高地地方のシンブー州，グミニ郡からやって来ている。彼らの村には，州の中心の町クンディアワから車で5～6時間かけて辿り着く。道は，アップダウンが多く，雨季には通行が難しい悪路である。

1986年に，最初に彼らの出身村を訪ねた時，私が驚いたのは，村の老人の大半が，ポートモレスビーに行ったことがあると答えたことだった。若者ばかりでなく，中高年の男性までもが，村の生活より町の生活の方が良いと語る。「村では体は汚れ，重労働のため体

＊4　委任統治領ニューギニアとオーストラリア領パプアを統合し大戦のために結成された行政組織，ANGAUは，ネイティヴのニューギニア人を軍荷の運搬人として，あるいは兵補（「縮れ髪の天使」fuzzy woozy angel）として，徴用した。

＊5　独立直前の1973年，セトゥルメントをめぐる政府白書が公表された。そこでは，セトゥルメントを重要な住宅ストックとみなし，それを排除するのではなく，むしろ公認して，サービスの提供や改築資金の援助などを行っていくことが提言された。これは当時，第三世界の都市開発をめぐり新たな潮流として生じてきた，スラムやスクォッターなどにおける住民自身による自助的住宅改善への援助の政策を反映したものだった。それに基づき，1970年代には，セトゥルメントに対する公的な援助が試みられた。しかし，それは政府有地上の集落に限られ，土地買収の合法性をめぐって植民地政府と歴史的に対立してきた地元部族の慣習法的共有地上の集落にはおよばなかった。さらに1980年代に入ると，国際開発の潮流が，次第に，効率化・民営化の方向に向かいはじめ，パプアニューギニアでも，それまでの住宅供給の中心だった政府による一戸建ての公営賃貸住宅の新規建設は行われなくなった。それに代わり，維持管理費用削減のため，既存の住宅を，居住者に持ち家として売り渡す政策がとられるようになった。これにより，ポートモレスビーの住宅市場は，持ち家を所有可能な層あるいは高級フラットやコンドミニアムに住む層と，セトゥルメントに居住せざるをえない階層との間の，二極分解が進むことになった（熊谷 2001a）。

の節々が痛くなる。それに比べ，町では金を得ておいしいものを食べたり飲んだりできる」という（熊谷 1996b）。新しい畑を開き，柵を作るのは主に男だが，日常的な畑の管理や収穫，豚の世話は，すべて女の仕事である。若い男たちの活躍の場だった，戦争・狩猟・祭は，今や村では輝きを失っている。

グミニの村からポートモレスビーに出かけるには，飛行機に乗らねばならない。村人が，「気軽に」ポートモレスビーを訪ねる秘密のひとつは，植民地以降，換金作物として高地に導入されたコーヒー栽培の存在である。西部高地に比べ平坦地の少ないシンブーでは，コーヒー栽培は，十分な現金収入を得て村で暮らせるほどのものではない。しかしポートモレスビーへの飛行機代をまかなうことはできる。もうひとつの要因はワントックの住むセトゥルメントの存在である。セトゥルメントに行けば，何とか暮らせるし，皆が金を出し合って帰りの飛行機代を工面してもくれる。現在失業中のある男は，ポートモレスビーに来たのは，「一度海を見てみたかった」からだと述べる。ポートモレスビーに行くことは，人々にとってたしかに「旅」の経験でもある。

しかし，彼（女）らがポートモレスビーにやって来るのは，もちろん物見遊山だけのためではない。医療や教育サービス・娯楽の欠如，度重なる部族戦争への怖れ，さらに若者にとっては婚資の高騰も大きな要因である。かつては豚と装身具だけでよかったが，今ではそれに加え最低でも数十万円の現金が必要である。

部族間の戦争は，独立以降，むしろ増加する傾向にある。かつて高地地方における戦争は，もっぱら隣接する部族やクラン間の，土地か豚か女をめぐる争いだった。人々の移動の範囲が拡大し，接触の機会が増したこと，貨幣経済が浸透し金をめぐるトラブルや妬みの機会も増えたことが，近年の紛争の頻発につながっている。さらに戦争に使われる武器は，かつての弓矢から，銃（手製を含む）へと「近代化」した。これにより，死者は増え，紛争がエスカレートしている。戦争が終わると，加勢したグループの死者に対し，当事者のグループから賠償金の支払いが行われる。ここでも莫大な豚と現金が流通する。

婚資を含め，村における現金の流通の増大は，消費物資の購入のためだけでなく，こうした「伝統的」な慣習とその実践という脈路でも生じている。こうした多額の現金は村の空間の中だけでは産出できない。都市の移住者たちは，事あるごとに貢献を求められ，またそれに積極的に応じている。こうして農村と都市との相互依存的な関係は，ますます強まることになる。

一方，都市での生活は困難さを増している。ポートモレスビーのフォーマルな労働市場は限られ，たとえ学歴があっても，ワントックのコネなどがともなわなければ参入は難しい。学歴も技能ももたないセトゥルメントの男たちは，（運がよければ）夜警や清掃人などの低賃金の未熟練労働職にありつく。しかし何もせずにぶらぶらしている男たちの数も多い。セトゥルメントの周りの急斜面には，畑が作られている。雨季にはいっせいに耕作され，まるでシンブーの村に迷い込んだかのような錯覚を起こさせる風景である。そこで作られているのは，自給用作物ではなく，町のマーケットで売り，現金収入を得るための

「換金作物」である。女たちの多くは，畑の世話のほか，セトゥルメントの中や街頭で，ビンロウジや煙草などさまざまな物を売っている。給料をもらってもビールに消費してしまったりする男たちに比べ，実際に家族の生活を支えているのは，都市でも女たちである。

しかし，こうしたセトゥルメント住民の生活空間と生存戦略は，今，危機にさらされている。パプアニューギニア政府とポートモレスビー（首都特別区）政府は，首都にふさわしい都市空間の整備と都市の美化を進めている（熊谷 2001a）。そこでは，掘立小屋の立ち並ぶセトゥルメントは邪魔物であり，露天での物売りも見苦しく，排除されるべき存在となる。特に露天商が好んで扱うビンロウジ（ビンロウヤシの実）は，パプアニューギニアの人々にとって欠かせぬ嗜好品であり，よく売れる。しかし石灰と一緒に嚙むことで口が赤く染まり，唾を吐くと道路や建物を汚すという理由で，ビンロウジ売りは，近年政府によって禁止されている。女たちは隠れて商っているが，警官や町が雇った警備員に見つかると没収されたり，殴られたりすることもある。

ポートモレスビーは，治安の悪い町であり，夜にはゴーストタウンと化す。ポートモレスビーの犯罪の多さと治安の悪化は，セトゥルメントがあるからだ，というのがメディアによって流布されているイメージである。「誤って都市に出てきてしまった」セトゥルメント住民たちを，「本来の場所」である村に送り返す（repatriation）ことが安全で美しい首都を作ることにつながるとの言説が喧伝されている。こうした中で，セトゥルメント住民の肉声は聞こえぬままである。

Ⅷ．辺境におけるローカリティの揺らぎと空間の仕切り直し

これまで語ってきたのは，私がフィールドで体験したパプアニューギニアにおけるローカリティとその「揺らぎ」の諸相である。3つのシーンから浮かび上がってくるのは，「ネイティヴ化」という想像／表象と実践であり，「ネイティヴ化」された人々の葛藤であった。

ミアンミンの人々，ブラックウォーターの人々にみるように，「辺境」の民族集団の中で，ローカルな空間と領域性は，常に再編成されていた。それは資源と人口の再配分の過程でもあり，集団の再生産にとって必要な実践であった。パプアニューギニアの人々にとって，新たなローカリティの変化と空間の「仕切り直し」は，グローバルな力，すなわち植民地化とキリスト教化によってもたらされた。移動が限られ，定住が促され，部族間戦争が禁じられることによって，ダイナミックなものとして存在していた集団化と空間領域の再編の過程は，封じ込められることになった。そして「民族集団」が出現した。

それは，物理的な「暴力」と，移動／「旅」の実践を，ともに在地の人々から奪い，植民地権力／西洋文明の側に独占する企てでもあった。それにより，パプアニューギニアは，「野蛮」を脱し，「秩序化」が図られた。

独立以降，政府は西洋文明という絶対的な「力」の行使者／代弁者であることをやめた。移動の自由が生まれ，逆に警察力は低下した。西洋文明の力に代わるべきナショナルな幻

想を欠くパプアニューギニアという国家を人々は信用しなくなった。それは，一面では，「暴力」と「旅」の権利を，ローカルな人々の手に投げ返す（しかしそれはけっして人々が「勝ち取った」ものではない）ことでもあった。それにより，現在のパプアニューギニアで，都市においても，農村においても，制御困難な草の根の暴力が蔓延することになったのは，皮肉というにはあまりに酷い結果といわねばならない。

自らの境遇を解釈し，西洋文明やその所産に接近しようとするパプアニューギニアの人々の地理的想像力とそれに基づく競争的な実践は，彼らが期待するような見返りを与えられず，空虚なものとなった。こうしてローカルな空間は「辺境化」され，「周縁化」された。そしてローカルな空間を失望と欲求不満が覆い尽くすことになった。

首都ポートモレスビーでは，植民地時代の価値観と様式を内在化した，ポストコロニアルな都市計画の理念と，グローバルな環境問題を「借用」した都市美化政策によって，都市エリートによる空間整備が進められている。都市に旅してきた移住者たちは，ワントックのセイフティネットにかろうじて守られながら，女性たちを中心に，都市の空閑地を畑として耕したり，路上でビンロウジを売ることで生き延びている。しかし，彼女たちの路上での商売は，都市美化の妨げになるとして追い立てられ，彼（女）らの住む掘立小屋集落も排除されようとしている。彼（女）らは，都市暴力の源泉であり，誤って都市に出てきた人たちであり，彼（女）らの本来の帰属の場である村に送り返すべきであるという言説が喧伝される。ポストコロニアルな統治者にとって，彼（女）らは，今も本質的には「ネイティヴ」なのである。そして，彼（女）たちに「旅」は許されていない。

興味深いのは，パプアニューギニアの最新のセンサス（2000年）において，ポートモレスビーの人口の伸び率が，パプアニューギニア全体の人口の増加率を下回ったという事実である。これは，ネイティヴたちが「旅」を終えて，自発的に自らの場所に帰っていったというハッピーエンドの物語ではむろんありえない。彼（女）らの想像の地理とそれに基づく旅，そして都市におけるセトゥルメントにみられる新たなローカリティの形成と空間の仕切り直しという実践が，今も彼（女）らにとって厳然と「異邦」であり続ける都市空間と権力によって，経済的にも社会的にも排除され，夢破れての結果にすぎない。

彼（女）たちの帰っていった先には，地理的想像力と空間の仕切り直しという実践の力を奪われ，閉塞したローカリティが待っている。そこからグローバル化に対抗する何ものかが生まれてくるのか，それとも行き場のないフラストレーションが制御不能なほど高まっていくのか。残念ながら，私は楽観的なシナリオを描く勇気は持ち合わせていない。

おわりに——フィールドワーカーの位置性と「旅」の帰結

これまで，私が，私自身のフィールドワークという「旅」を通じて見た（と信じた）ローカルなリアリティを語ってきた。それは，私の目に映ったものを，私自身が解釈し，表象した物語である。

しかし，フィールドワーカーとしての私（たち）が，彼（女）らの表象のあり方を再構

築し，異議申し立てをするということは，いったいどういう意味を持つのか。それは，われわれが（勝手に）引き受けた彼（女）らの代弁者としての役割の責任感ゆえなのか。それとも，われわれの世界（学問研究という世界を含む）の中で，よりよき理解者としての私自身の「優位性」を確認したいだけなのか。

フィールドワーカーは，いったいどこに位置しているのだろう？　フィールド（現場）と自らのホームの間を旅しながら，フィールドにある時は，そこに溶け込んだふりをしつつ，常にどこかで違和感を覚え，ホームにある時は，大学や学界といった自らの制度に居心地の悪さを感じつつも納まっている。フィールドワーカーは，どちらの空間にも完全には帰属していない。彼がいるのは，その間――「あわいの空間（in-between space）」である。

旅人が旅の物語を語って聞かせるように，フィールドワークで得たものを，自らの解釈を交えて，われわれ自身の世界（ホーム）に伝えることだけが，フィールドワーカーの役割なのだろうか。それは，われわれの地理的想像力の豊富化には寄与するかもしれない。ただし，それは「最上でも」ということであって，大部分は単なる第三世界のカタログ作りに貢献するだけだ。しかしそのカタログは，われわれが彼（女）らを政治経済的・知的に「支配」するための道具としては十分に役に立つ。

一方で，彼（女）らの「地理的想像力」は貧しいままである。そして空間の仕切り直しと，「旅」する力をめぐる，われわれと，彼（女）らの格差はますます開くばかりだ。私たちは，パプアニューギニアへ旅し，そこをフィールドワークする。しかし，「周辺」の「周辺」に位置するパプアニューギニアの人々にとって――たとえ低賃金出稼ぎ労働者としてさえも――自らの意思で，日本を「旅」することなど望むべくもない。

このような現実世界の落差を眼前にして，フィールドワーカーが実践すべきこと，できることは，いったい何だろうか。2つの世界を対比し，分節化し，分析して，理解することだけでは，2つの世界は分断され，対立するばかりだ。そして「知」の権力は一方的にわれわれの側に蓄積される。それを否定し，逆に，2つの世界を結び合わせ，つなげるためにはどうしたらよいのか。まず，われわれの側に集積し，独占している「知」の力を，双方向的なものへと解き放つこと。それと同時に，双方向的な理解を妨げている「下部構造」でもある，彼我の政治経済的な格差とそれを作り出すシステムを改変すべく，反システムのための運動を各自の場において構想し，実践すること。それによって彼（女）らの側からの空間の仕切り直しにいささかでも貢献すること。それがフィールドワーカーとしての地域研究者が究極的にめざしていくものではないか*6。

＊6　私自身のささやかな実践の試みについては，次の文献を参照してほしい。熊谷圭知（2001）

参考文献

春日直樹編
1999 『オセアニア・オリエンタリズム』世界思想社.
加藤政洋・神田孝治
1999 「旅と周縁の空間」『現代思想』27（13）：127-141.
熊谷圭知
1988 「タイム・バルス・イ・カム：パプアニューギニア，ミアンミン族における西欧世界との接触と社会変容」『阪南論集』23（4）：1-20.
1989a 「祖先の失った富――パプアニューギニア，ミアンミン族における神話と戦争・移動をめぐる一考察」『阪南論集』25（1・2・3合併号）：145-164.
1989b 「現代を生きるニューギニア高地の人々」『地理』34，7：39-46.
2000 「パプアニューギニア，ブラックウォーターの人々の歴史と空間――自然との『調和』でもなく，外部への『従属』でもなく」熊谷・西川編（2000）3-26.
2001a 「『都市美化』か，都市の『農村化』か？――ポートモレスビーにおける都市空間の変容とセトゥルメント住民の生活世界」竹内啓一編（2001）『都市・空間・権力』大明堂，77-129.
2001b 「JICA専門家としてのポートモレスビーのセトゥルメント問題への関与の試み」『お茶の水地理』42：47-68.
熊谷圭知・西川大二郎編
2000 『第三世界を描く地誌――ローカルからグローバルへ』古今書院.
熊谷圭知・塩田光喜編
2000 『都市の誕生――太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容』アジア経済研究所.
ジェイムズ・クリフォード［毛利嘉孝他訳］
2002 『ルーツ――20世紀後期の旅と翻訳』月曜社.
周蕾［中條献訳］
1996 「ネイティヴはどこへ行ったか？」『思想』859：pp. 51-80.
ピーター・ワースレイ［吉田正紀訳］
1981 『千年王国と未開社会――メラネシアのカーゴ・カルト運動』紀伊國屋書店.
Kumagai, Keichi
1998 'Migration and Shifting Settlement Patterns among the Kapriman People of East Sepik Province, Papua New Guinea', in Yoshida, S. and Y. Toyoda eds. (1998) "*Fringe Areas of Highlands in Papua New Guinea*", *Senri Ethnological Studies* 47：pp. 43-60.
May, R. J., ed.
1982 *Micronationalist Movements in Papua New Guinea*, Canberra, Australian National University.
Morren, George E. B.
1986 *The Miyanmin : Human Ecology of a Papua New Guinea Society*, Michigan, UMI Research Press.
Neville, R. T.
1956/1957 Telefomin Patrol Report, No. 2 & No. 4 of 1956/57, Telefomin, Sepik District, Territory of Papua New Guinea.
Quodling, Paul
1991 *Boungainville : The Mine and the People*, Maryborough, Australian Print Group.
Rogers, J. R.
1949 Telefomin Patrol Report, No. 2, 1948/49, Telefomin, Sepik District, Territory of Papua New Guinea.
Taylor, J. L.
1971 Hagen-Sepik Patrol 1938-1939 : interim report, *New Guinea* 6-3 : pp. 24-45.
Townsend, G. W. L.
1968 *District Officer : From Untamed New Guinea to Lake of Success*, Sydney, Pacific Publications.